

第二百四十四話 情報は人間力だ！（葬られた重大情報）

1945(S20)年8月9日、ソ連は日ソ中立条約に違反して、満州、南樺太に侵攻し、ポツダム宣言受諾後の8月15日から千島列島、北方四島までも占領した。日本固有の領土たる北方領土は未だに返還されていない。ソ連にとっては、ヤルタ密約に基づく行動であったが、日本にとっては正に驚天動地の大事件であった。このヤルタ密約に関する興味深い話題がある。それを紹介する。

1 小野寺信少将（1897～1987）の経歴

密約情報を掴み、参謀本部に報告したのは、在スウェーデン公使館付駐在武官であった小野寺信少将であり、彼の経歴は以下の通りである。

岩手県出身、陸士31期、歩兵、陸大卒、ロシア語の能力を見込まれてロシア専門家の道を歩む。参謀本部ロシア班を経て、バルト三国の武官として情報収集活動、ロシア班復帰後上海にて和平工作に従事する。日米開戦直前の1940年11月、スウェーデン公使館付武官に補職された。小野寺の送った情報は「ブ情報」と呼ばれ、貴重な情報源であった。敗戦後のS21年3月復員帰国、巣鴨に収監された。

2 ヤルタ密約に関する情報の入手と日本への報告



小野寺と親密な親交のあったポーランド亡命政府参謀本部情報部の大物リビコフスキーは、止む無く国外退去となり、その後イタリア戦線に出た。彼の直属の上司である情報部長ガリから、ヤルタ会談（1945/2/4～2/11）直後の2月中旬「ソ連が裏切る。」との情報が寄せられ、これが小野寺電となった。勿論、ポーランドは、連合国側であり、情報部長が情報提供したというのは、ポーランド亡命政府の公式の意思と見做していいだろう。

我が国の陸軍参謀本部は、この「小野寺電」を信じず、或いは悪意を持って握りつぶされ（ソ連を仲介しての和平に期待する勢力？）、この貴重な情報が活かされることはなかった。残念だが・・・手の打ちようもあつたらうに思わずにはおれない。

3 小野寺少将が情報を入手し得た要因

幾つかの要因が指摘されている。日露戦争でのポーランド人捕虜への寛容な扱い、シベリアでのポーランド人孤児765名の救出、杉原千敏の「命のビザ」（救われたのはポーランドから逃れた人々）、ロシアの侵略と圧政に苦しめられたポーランドは日露戦争に勝利した日本を尊敬していた。

特に指摘されるのが小野寺の人的魅力である。ナチス親衛隊から執拗に狙われていたリビコフスキーを徹底的に匿い庇護し、且つ日本国内からの非難からも擁護した。日本名のパスポートまで準備したという。小野寺は庇護の見返りを求めることもしなかった。ガリは、小野寺とリビコフスキーが交わした情報を送るとの約束を果たしたのだ。日本の厚意への返礼であったとも云えよう。ソ連が攻めてきたらただでは済まないことを知悉していたポーランドは、友人である日本を同じ目に遭わせたくないとして、貴重な情報を提供したのだろう。小野寺は巣鴨で、本件情報入手の件については口を閉ざし語らず。

4 若干のコメント

- ・ 人間性、人間的な魅力、相互の強固な絆の構築が最大の情報入手手段
- ・ 姑息な手段で入手し得る情報には限界がある。
- ・ 重要な情報も、その価値の解らない者にとっては単なる雑音・我楽多だ。知りたくない情報は無視しようとするのが人間の性か。
- ・ 日本も情報マンを育てねば、国際社会に伍して行けないのではと危惧。